第８課　奴隷から相続人へ

【暗唱聖句】

「ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです」ガラテヤ4:7

かつて、わたしたちは律法の支配下の下、罪の奴隷でしたが、救い主イエス・キリストを信じる信仰によって、いまは奴隷ではなく、神様の子となりました。神様の子供なのだから、当然神様のものを相続することができます。神様の子供が相続するものとは、天のあらゆる富です。その中でも最も素晴らしいものが、天国での永遠の命です。

【今週のテーマ】

【日曜日・キリストにおける私たちの状態】

「しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」ガラテヤ3:25、26

養育係が必要なのは、その人が成人するまでです。キリストを信じる信仰により、わたしたちは成人し、養育係としての律法ではなく、成人した神の子として律法を見つめことができるようになりました。ところで、英語の聖書では、神様の子供たちではなく、神様の息子たちと訳されています。これはユダヤの社会において男性の子孫に財産が相続されたことを意識して、神様の約束の恵みは、女性でも、異邦人でも、神様を信じる信仰により相続を受けつぐものとされたことを表しています。

また、神の子とは、信仰によってキリストと結ばれた人たちのことを指していますが、キリストと結ばれた人たちとは、具体的には、「洗礼を受けてキリストに結ばれた」（ガラテヤ3:27）人たちのことです。パウロはバプテスマは人をキリストと結びつける決定的な決断であるとみなしています。さらに、ガラテヤ3:27ではバプテスマによって「あなたがたは皆、キリストを着ているからです」と続けます。キリストを着るとはキリストと一体となっていることを意味しています。王の婚礼に礼服を着ないでやってきた男のたとえ話がありますが、キリストと一体となっていない者は天国に入ることができないことを教えています。そのはじめの一歩がバプテスマなのです。

信仰をもってバプテスマを受けるなら、「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」ガラテヤ3:28。

【月曜日・世を支配する緒霊に縛られて】

「つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所有者であっても僕と何ら変わるところがなく、父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいます」ガラテヤ4:1、2

未成年である間は、全財産の所有者であっても、父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいて、自由に使うことができません。その状態は僕と何ら変わりません。パウロは神の相続人たちも同様なのだと語ります。

「同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました」ガラテヤ4:3

イエスキリストが地上に来られて、すべてのものから解放し、自由にしてくださる本当の信仰が何たるかを知るまでは、その自由という恵みを相続することができない未成年のようなものだったのだというわけです。その状態にあるとき、わたしたちは「世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました」と語られていますが、この意味するところは、本当の自由をまだ知らなかったのだから、この世の様々な事柄に対して、奴隷のような状態だったのだということです。

「世を支配する緒霊」とは、悪霊を指しているというよりも、「物事のイロハ」、「初歩的なこと」という意味の言葉です。つまり、神様の視点からすれば、旧約の教えは、救済の基本に対する全く初歩的なことであり、わたしたちはそれで右往左往、悪戦苦闘していて、それを遥かに超えた神の世界を知らずにいる状態だったのだということです。それはある意味、この世の緒霊に心と思いが支配されている状態とも言えます。

【火曜日・神はその御子を…お遣わしになりました】

「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」ガラテヤ4:4

「満ちる」という表現は、「時は満ち、神の国は近づいた」という言葉と同じ表現ですが、これは予め定められた時があり、それは数えられており、そのときがついに来たということであり、偶然来たとか、突然来たというものではないことを表しています。神様の救済計画は人間が罪を犯す前から、もし人間が罪を犯した場合どうするかが天において話し合われており、人間が罪を犯した瞬間、その救済計画は発動され、そして今からおよそ2000年前に、時が満ちて、救い主として神の御子がこの世においでくださったのです。

キリストがこの地上に来られる方法は、人間と同じ最も弱い姿で女の体内から生まれ、しかも「律法の下」に、つまり人類の有罪判決を担われてお生まれになったのでした。キリストは第二のアダムとして、第一のアダムが犯した失敗を、完全な従順によって律法の要求を満たし、贖う必要があったのでした。

【水曜日・養子の特権】

「それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした」ガラテヤ4:5

キリストがなぜ人となり、この地上に来てくださったのか、それはわたしたちを律法の支配下から贖いだし、神の子としてくださるためでした。ここで贖い出すという言葉が使われていますが、これは「買い戻す」という意味の言葉です。奴隷を自由にするときに支払われた代価を表す言葉で、もともと人間は神様のものでした。しかし、罪の結果、悪魔の奴隷となり、その支配下におかされていた人間が自由になるためには、もう一度神様のものとなるためには、その代価が支払われなければなりませんでした。キリストはご自分の命という代価を支払って、わたしたちをご自分のもとへと買い戻してくださったのです。

わたしたちはキリストによって買い戻されて、何から解放されたのでしょうか。

①悪魔とその策略

②死

③罪の支配と力

④律法の有罪判決

パウロはキリストが私たちのために成し遂げてくださったことを表すために、しばしば養子という言葉を使っています。通常、誰かを養子にするということは、以下のことに同意しなければなりません。

①養子とされた子は里親の本当の子供になる。②里親はその子をきちんと育て、必要な食べ物や着物を与える。③里親は養子にした子を勘当できない。④その子が奴隷の身に落とされることはない。⑤その子の生みの親たちは彼を取り戻す権利がない。⑥養子縁組は相続権を確立する。

この養子縁組で定められた権利や保証を、そのまま神様とわたしたちに当てはめたとき、本当に驚くべきことを神様はわたしたち一人ひとりに対してしてくださったのだとわかるでしょう。

【木曜日・なぜ奴隷の戻るのか】

「しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか」4:9

わたしたちは神様を知り、また神様から知られ、素晴らしい約束を受け継ぐものとされました。それなのに、再び元の状態に戻ってしまうことがあります。わざわざ奴隷のような苦しい状態に戻ろうとするのはなぜなのかとパウロは言います。理屈から言えばありえないことです。

しかし、人間は神様の愛の大きさがわからなくなってしまうときがあるのです。すると、急に不安になり、今のままの自分ではだめだと思うようになってしまいます。そして、律法を守ることによって神様から認められなければならないという、元の状態に戻ってしまうのです。パウロは具体的に次のような例を挙げています。

「あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています。あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です」ガラテヤ4:10、11

礼典律と呼ばれる多くのモーセの律法における祭儀事の中には、日、月、時節、年を重んじるものがたくさんありました。たとえば旧約聖書のレビ記には以下のような記述があります。

レビ記23:5第一の月の十四日の夕暮れが主の過越である。（過越し祭）

レビ記23:16七週間を経た翌日まで、五十日を数えたならば、主に新穀の献げ物をささげる。（刈り入れの祭）

レビ記23:28この日にはいかなる仕事もしてはならない。この日は贖罪日であり、あなたたちの神、主の御前においてあなたたちのために罪の贖いの儀式を行う日である。

レビ記25:4七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない。

　また、逆にこのみ言葉から安息日まで、もう守らなくても良いのだと発展させている人もいますが、それは正しくはありません。安息日はいろいろな日、月、時節、年などとパウロが表現している礼典律は別物です。